

きらめき人

人情味溢れる店主の生きがい、おおもりの食堂！



わたなべ せいご 渡辺清吾さん

「荒れ狂う海、震災、大病など、何度も死に直面する波瀾万丈な人生だが、毎日楽しく生かされている」と話す

SEIGO WATANABE

遠 洋漁業船の乗組員だった渡辺清吾さんは、下船して陸(おか)で生きることを決断した後、大森町の自宅一部を改装し「焼き鳥おもり」という居酒屋を始めた。軒先に吊るされた真っ赤な提灯が、多くの呑兵衛たちを引き寄せ、元漁師ならではの見事な包丁さばきと渡辺さんの人柄にほれたなじみの客で大賑わいだった。東日本震災の巨大津波で自宅と居酒屋を流失するまでは、震災後、渡辺さんは体調を崩してしまっただが、たくさんの方の応援や支援のおかげで「やる気スイッチ」が入り、自宅跡の仮設店舗から、新しい防波堤の真下に移転し「おもり食堂」を開店させた。数あるメニューだが、おいしさに加えボリュームのすごさにも驚かされる。

「おもり食堂だからね。腹いっぱい食ってもらって午後のお仕事頑張ってもらいたいのだ。」豪快に笑うマスターのサービス精神は健在だ。

ボランティアとして町を訪れた人や復興工事関係の人たちがリピーターとして何度も顔を出してくれるそうで、得意のギターや三味線を奏で、一緒に歌うこともあるという。ただ、復興事業の関係で、この地での営業は今年秋までとなる。

「お世話になった人たちに会えなくなるのが辛いけど、閉店するまでは一生懸命にやる！」おおもりの食堂、最後の夏は熱くなりそうだ。

集う、企業家たち

スポーツ×たこ焼き×酒で活性化！

隈 研吾さんのグラウンドデザインにおいて「観光・商業エリア」となる市街地の活性化を図るため、2018年1月に地域おこし協力隊「市街地活性化支援員」に着任した井原健児さん。これまでの経歴で培った「酒」と「料理」の知識とスキルに、元々の趣味であった「スポーツ」を組み合わせ、飲食店×スポーツ交流拠点「OCTV 369 (オクトヴァン・サンリク)」としての起業を図っている。

「さっそく営業を開始」と意気込んだものの、実は計画していたトレーラーハウスでの営業が、宮城県のルール上できないことが発覚。いまだオープンができず、現在はイベント時の出店などで酒と料理を振る舞っている。トレーラーを生かしつつ営業する方法を模索中とのこと。

「場所や店の箱が変わってしまうかもしれない、多少時間がかかるかもしれない、でもなんとかしてやり遂げます！」と強い意志を示す。バーもストリートスポーツも、一見ハードルが高いイメージ。それを崩すような入口の場所、好きになる・興味を持つきっかけになれるような場所が、井原さんの目指す空間。「自然と人が集って、仲間をつくれるような場所にもしたいんです」と、いきなり困難に直面しながらも、その目はしっかりと前を見据えていた。

KENJI IHARA



いはら けん 井原健児さん

バーでの勤務経験から酒に関する知識も深く、「ワイン検定シルバークラス」「テキーラマエストロ」「ラムコンシェルジュ」とさまざまな資格を持つ